

2 海洋観測

黒潮流域と沖縄本島沿岸の海洋観測を行い、漁況との関連性を究明し、カツオ漁況予報資料に供するため実施した。

A 黒潮流域海洋観測

1) 第1次航海

観測期日 1967年12月21日～12月27日、使用船舶 函南丸159トン

観測項目 気象、海象、水温、塩素量

観測点 ST1 (26°08' N, 126°30' E) ST2 (26°23' N, 126°09' E)
ST3 (26°39' N, 125°45' E) ST4 (26°54' N 125°28' E)
ST5 (26°12' N 124°27' E) ST6 (25°48' N 124°50' E) ST7
(25°30' N 125°12' E) ST8 (24°30' N 123°25' E) ST9 (24°35' N
122°00' E) ST10 (24°40' N 122°30' E) ST11 (24°42' N 122°22'
E)

海上気象、海象、水温については表工に示した。図2から表面水温は22°C台が久米島北方まで舌状に伸びている。23°C台は台湾より大きく伸び、26°10' N 124°Eあたりまで張りだしている。これは大陸棚上の冷水の勢力が弱いことを示すだろう。先島、本島周辺は20°C台を示した。

100m層は表面水温と比べて約1°Cの温度差があるが、22°C台は赤尾嶼東北方まで伸びている。

図3の水温鉛直断面図から大陸棚縁辺部の低層は19-20°C台であるが、X線に限ってみると、20°Cを示している100-170mは黒潮主流域とみなされる。ST2、ST3が該当していた。200m以深の下層では、大陸棚より低い値を示し、ST3では200mあたりに躍層がみられた。

図2からST6は黒潮流軸とみられる。

図3のZ線では、ST10で170mまで20°Cを示し、黒潮流軸域とみられる。

表面と100m層の水温水平分布図から今冬季の黒潮はやや台湾よりに北上していることがうかがわれる。